

法学部 3年

徳増 和香子

英国

2018年9月3日-

2018年9月27日



渡航概要と内容

模様それぞれに名前がついており、文化を守るため政府による登録制度がとられているタータンチェックには格調高いイメージがある。一方京大では、チェックシャツ+眼鏡=「イカ京」：おしゃれに关心がなくダサいというイメージがある。スコットランドの歴史やその歴史におけるタータンの位置づけを学び、現代のタータン文化はどのようなものであるかを、自分がチェックに対して抱いているイメージも確認しつつ、フィールドワークで体感したい。またタータンについて学んだ後、京大スクールカラーの濃紺、クスノキの緑、時計台の茶色などを用いた京大オリジナルタータンをスコットランド政府に登記し、そのタータンを通して京大生にチェックの良さを広めたい。そんな私のおもろチャレンジは渡航前から順風満帆とはいかなかった。

採択決定後、『タータンチェックの文化史』の著者である奥田実紀さんにFacebookを通して連絡をとった。スコットランドでタータン作りに協力していただけるデザイナーの方の情報などを教えていただけたら現地での調査計画も明確になるだろう。軽い気持ちで質問したところ丁寧なお返事をいただき、そこで初めて他と被らないタータン柄を作る以外の現実的な登記の困難さに気付いた。以下3点が大きな課題である。

- ・デザイナーの方に協力をお願いする場合、おもろチャレンジとは言え謝礼無しでは不可能であろうこと。

- ・デザインの版権、使用する際の版権などが発生するため、登記後も誰が権利の窓口になるか考えておく必要があること。

- ・「京大」という名前を付けることに大学側の承認があるのか、正式な承認書がないと登記所で登録できないだろうこと。

渡航までにもっとタータンについて知識を得なければ、と思い奥田さんに教えていただいた「神戸タータン」に関する講演会に参加した。「神戸タータン」は石田洋服店の石田原弘さんが

実際にデザインし登記したタータンで、神戸市のPRポスターに使われたりグッズが販売されたりとある程度公式なタータンとして使われている。石田原さんの講演を聞き、商品開発を目指すうえでのさらなる課題に直面した。

- ・スコットランド政府でタータンを登記しても正式なタータンという「お墨付き」がもらえるだけで法的な拘束力が発生しないこと。
- ・日本での商品化にあたり、商標登録が必要なこと(もちろん費用が発生)。
- ・デザインで商標登録を取った例は少なく難しいこと。

課題は山積みだが、デザインが完成し登記までいけるならば、京大の名義を使用する承諾書が必要になると思い国際教育交流課に問い合わせた。名義使用については広報課に問い合わせてみてほしいという回答を得たため広報課に問い合わせた。ところが広報課でも前例のない案件であり、産官学連携課に繋ぐと回答を得た。後日国際教育交流課でお話することになり、学内の何らかの委員会で検討が必要になるかもしれないと言われた。日本でタータン登記制度について十分な情報が入らないまま企画したものの、自分の挑戦しようとしていることの大きさに気付き、渡航を2週間後に控え、成し遂げられるのかと怖くなってしまった。そんな時に山極総長の「別に、自分が決めたタイトル通りにやらんでもいいんですよ。」という言葉を思い出した。私の当初の計画はタータンに関する知識を身に着けることに重きをおくよう変更することになった。

主な滞在先は、エдинバラ、セルカーカ、インヴァネス、スカイ島、グラスゴー、スターリング、ロンドン。都市間は National Rail で移動。

①スコットランドの歴史やその歴史におけるタータンの位置づけを学ぶ

[エдинバラ城、国立戦争博物館、国立スコットランド美術館、ホリルード宮殿、スコットランド国立博物館、スカイ島(キルトロック)、グラスゴーカテドラル、スターリング城、ナショナルウォレスモニュメント、ケルビングローブ美術館博物館、対比としてロンドン]

本を読むだけでは分からぬ「本物」を体感する。



エдинバラ城



スコットランド国立博物館にて



キルトロック

②現代のタータン文化はどのようなものであるかを、自分がチェックに対して抱いているイメージも確認しつつ、フィールドワークで体感する

〔街歩き、エдинバラ大学、グラスゴー大学、ANTAなどタータンが置いてあるお店〕
キルト以外のタータンを探り入れた商品や大学公式タータンとそのグッズなど、日常生活の中のタータンを探してひたすら歩く。またそれらを見て自分はどのようなイメージを持つのかを確認。商品を手に取っているお客様の反応もチェック。



圧巻の品ぞろえ



タータンデザインの日用品



グラスゴー大学公式タータングッズ



滞在した B&B

③タータンに関する知識を得る

〔Lochcarron of Scotland 工場見学、Tartan Weaving Mill & Exhibition、Scottish Kiltmaker Visitor Centre、GORDON NICOLSON KILTMAKERS〕

タータン織物が織られていく様子や、それを用いた伝統衣装キルトの制作過程を見学。またタータン登記所のホームページに記載されていたタータンデザイナーの方を突撃インタビュー。



Lochcarron 社の工場



GORDON NICOLSON KILTMAKERS
ここでタータンのデザインも行う



Scottish Kiltmaker Visitor
Centre にてキルト制作を見学



サンプルが保存された本が
何十冊もある

④おまけ

〔グラスゴーセントラルモスク〕

第三外国語として前期に履修していたアラビア語の勉強の一環としてモスクを見学。お土産にコーランをもらう。

渡航中に最も苦労したことは語学力不足だ。リスニング力とスピーキング力の無さを実感した。英語は得意ではないが嫌いではないし何とかなるだろう、と思っていたが現地の方の話すスピードについていけず、最初は聞き取れないことが多かった。特にグラスゴーでは訛りが強く(インヴァネスで現地の方に忠告を受けるほど)、さらに早口な人が多く、一週間以上スコットランドで過ごし英語力が向上しつつあると思っていた矢先に落ち込んでしまった。落ち込んでいても仕方がないので、宿泊先にテレビがあるときはBBCを見てリスニング力の向上に努めた。また話をするときにはあらかじめゆっくり話してくれるようお願いをしたり、聞き直しても分からなかつたことは紙に書いてもらったりした。スピーキングに関しては自分が思っていることを伝えることは簡単なようで本当に難しかった。自分が何のためにここにいて、何が知りたいのか。一番大事なことをうまく伝えられず、「スコットランドに何しに来たの?」と聞かれたときに(一

人旅というと大体聞かれた)、「観光」や「ホリデー」と答えてしまうことがあった。タータンを学び京大でのチェックのイメージを向上させるために来ているのに。タータンについて学んでいふと言えば、もっと何かおしえてくれたかもしれないのに。このままではもったいないと思い、絶対に「観光」と答えない決意し、質問したいことを英語に訳しておいたりカンペを用意した。どの方もとても優しく応じてくれ、ありがたかった。

大きなトラブルは無かったが、度々電車が遅延したり、駅に行ってみるとキャンセルになっていることもあった。日本のようにアナウンスがないので状況を把握したいときには、聞いてみても分からぬかも知れないと思いつつも駅員の方に聞きに行った。早口で対応されて分からない部分もあったが電車が出るのかどうかや、次の便が何分後かなど主要な部分は聞き取ることができたので何とかなった。

思っていたよりも天候に恵まれたが、スコットランド特有の天気の悪さから足止めを食らう日もあった。小雨の時や風が強いときは傘をささず、現地の方に倣って上着のフードを被って対応した。台風並み(それ以上?)の強風の日は真っすぐ歩くことが困難で危険だと思ったため、屋内の美術館を訪れたりカフェで天気の回復を待ったりした。

■ 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

日本でイギリスと呼ばれるUKは4つの国からなる。私はその事実を知りながらも今までイギリスと呼ぶことに違和感を感じたことは無く、スコットランドはイギリスの一部という認識だった。渡航を通して「イギリスではなくUKで、しかもここはスコットランドだ。」と実感した。空港の入国審査で「スコットランドで何するの?」と聞かれたこと、街で出会った方にも「スコットランドは初めて?」と聞かれたこと、街ではたまくスコットランド国旗、スコットランド独自のポンド紙幣、スコティッシュブレックファースト、鉄道で北上していくといつの間にかゲール語と二言語併用になっている駅名…。独立投票が行われたことも記憶に新しいが、独立を求める激しい気持ちを感じることはなく、ただ静かに当然のこととして「スコットランド」が存在していると感じた。この気付きを面白いと思い、ロンドンまで足を延ばしてみることにした。ロンドンではイングランドを感じることは無く、ユニオンジャックにあふれた街で今までの一つの国イギリスという認識が間違いであるとは思わなかった。昔から独立を求めてイングランドと戦い、その戦いの歴史の中でタータンが禁止されたこともあったスコットランドに行かないと理解することがなかっただろう。勝った側には見えない、気付かないことが多く、負けた側にしか分からないことがあるのかもしれない。タータン、バグパイプ、ゲール語などの独自の文化を観光レベル、またそのレベルを超えて守っている誇り高い人々がいた。

また町中いたるところにタータンがあふれており見つけるたびにわくわくした。タータンは現代の生活のあらゆる部分に取り入れられており、マフラーはもちろんのことレストランのテーブルクロス、図書館の椅子などにもタータンが使われていた。華やかで美しい模様のタータンはおしゃれなアイテムとして人気があるようだ。伝統的な側面としては、教会で行われていた結婚式では正装としてキルトを着用した方を多く見かけた。キルトは現在も最も人気があるフォーマルウェアだそうだ。大学オリジナルタータンを用いたキルトも販売されており、卒業式などで着用

するそうだ。日本の家紋のように一族ごとに決まっているクランタータンはサンプルが多く置かれており、観光客の方も熱心に自分のクランタータンを探していた(日本人はクランがなくて残念)。スコットランドを語るうえで歴史上切り離せないタータンは、過去のものとしてではなく現在も確かにスコットランドを象徴するものだった。一方、廃業した織物工場も見かけたし、タータンデザイナーの方がいると調べて訪れたキルトメーカーが閉業していたこともあった。なんだかさみしい気持ちになった。

せっかく現地に来ているのだから！ということで、The Scottish Register of Tartan のホームページに載っているキルトメーカーを訪ねタータンデザイナーの方に質問をした。うまく質問ができるだろうか、聞き取れなかったらどうしよう、などと考え一瞬躊躇したが突撃した。支援してもらっているのに何も得ずに帰れないという自己へのプレッシャーはもちろん、何か行動を起こすには興味への探求心、そして「勢い」が大事だった。知りたい見たいという自己の知的探求心が私を突き動かすという体験は初めてで面白いと思った。失礼があつてはいけないと思うことは大切なことだが、敬語表現の無い英語で「行間を読む」という日本人らしいパワーを持っていないうであろう外国の方とお話をすると「勢い」と笑顔で乗り切っていくと実感した。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

タータンだけを追いかけて3週間以上渡航した経験は何にも代えがたい良い経験となった。私が学んだことをまずは応援してくれた家族や友達から、またできるだけ多くの人に共有していきたい。

十分な語学力が無くても「勢い」があれば何とかなること、また百聞は一見に如かずということを体感したので、語学力の向上に努めつつも、言葉の壁に臆さず自分の興味を追求する海外渡航にチャレンジし続けたい。様々な刺激を受けながら一人で長期渡航をして「私、案外できるやん」という自信がついたため、この渡航経験はこれから困難に直面した際に前向きに対処していく原動力になると思う。また外国の文化を理解しようとすることはその国についてさらなる知見を得たり、日本と対比する中で日本の文化の良さに気付くことができる機会でもあるので、これからも積極的に異文化理解に努めていきたい。

所属している行政法ゼミでは後期にゼミ論文を書くことになっている。テーマは自由なので今後タータン登記と日本での商品化を目指すうえで直面する法律上の問題を研究する予定だ。京大オリジナルタータンの商品化が面白そうだと思い企画したものの知識が足りないことを実感したので、次は自分の専門分野である法律の面からタータンについて考えていきたい。そして卒業するまでに京大タータンの登記と商品化を目指したい。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

やりたいことがある方はもちろん、大学生活で何か自分だけの体験をしたいと考えている方にはぜひ応募してほしいと思います。自分の考えを熱意を込めて人に伝えることは思っていたよりも難しく、とてもいい経験になりました。私は企画書を書く段階で自分の興味が整理されたり関

心が深まつたりしました。応募の際には友達などに企画書を読んでもらい、考えが伝わるかや、おもしろそうと思うかなどを聞くものよいと思います。やりたいことが明確にない方も、早い段階からおもろチャレンジに応募できそうなネタ探しをしたらしいと思います。そうする中で視野が広がつたり、本当に自分の興味があることが見つかると思います。

■ 主な奨学金の使途

- *渡航費
- *宿泊費
- *現地交通費、調査費
- *海外旅行保険、通信費 など